



10月号

平成29年10月25日

桜花爛漫

郷土を舞台に 夢に向かい ともに歩む学校

心豊かで
たぐましい庄川っ子

- ・考える子
- ・思いやりのある子
- ・元気な子

ふるさとを思う気持ち

校長 水口 悟

霜始めて降る（しも はじめて ふる 霜降・初候）

霜が初めて降りるころ。農作物には大敵。足もとから冷えが来ないように気をつけて。（新暦では、およそ十月二十三日～十月二十七日ごろ 日本七十二候を楽しむより）

第4作目となる‘うちわ’が完成しました。これまでは、小中学校の児童・生徒による作品でしたが、今回は保育園の年長さんにも協力してもらい作成しました。年長さん（6名）が描いた獅子は個性があり、どの獅子も生き生きとしています。「うちの孫は、獅子なんてよう描けんぞ」という声を耳にし、「やっぱり庄川の環境や文化あってこそ」なのだと思えました。保育園と小・中学校の子どもたちが、第30回目となる飛騨庄川ふるさと祭りに、ご来場されるお客さん方に配布してもらいたいという思いで、1000枚のうちわを庄川町観光協会長の三島さん、飛騨庄川ふるさと祭り実行委員長の渡邊さん、庄川町支所長の田中さんに手渡しました。ふるさと庄川をデザインする力は、4回目となるうちわづくりを通して確実に高まっています。当日、雨傘の柄のうちわを上手に引っかけているお客さんの姿が見られ、庄川の子どものふるさとを思う気持ちが、どんどん広がっていくことを強く願いました。参加されたお客さんからのお手紙の一部を紹介いたします。『小雨の降る中でしたが、200名程のお客さんは終始傘を持ったまま不動で獅子舞・民謡・連獅子等を真剣な眼差しで見ておられたのが印象的でした。来年、小学校へ入学する6人のすばらしく可愛い‘獅子の絵うちわ’大切に保存します』

その夜、ひねり踊り関係者による懇親会がありました。青年の方が沢山参加されていました。みなさん、それぞれに「やっぱり、庄川はいいな」と話し、庄川のことを一生懸命考えていました。また、ある方が「私が小学生の頃、大人の人がひねり踊りで踊る姿に憧れたように、今この子たちは私の姿を見て、あの頃の私と同じ気持ちでいるのだろうと思った」と話されました。小さい頃の自分と青年になった今の自分を重ねて語る姿がとても印象的でした。

当日（15日）は、雨が降っていましたが、子どもたちはとてもわくわくしていました。それはそうです。憧れの3年に一度しかない貴重なひねり踊りに出演できるのですから。そのために、夏休みから5回、真剣に練習してきたのですから。午前8時30分を過ぎると児童用の教室には、数名の女性の方が子どもたちの顔に化粧する準備をしています。子どもたちは、ドキドキしながら友達顔をのぞき込み、ワクワクしながら自分の顔を係の方に差し出し……。順番に順番に、ひねり踊りの顔が完成していきます。大勢のお母さんたちが、ウキウキしながらも見事に変身していくわが子の顔を大切に映像に納めていました。

ひとり歩きのできる子は、つながる力のある子

26日の市音楽会に向けて、練習をしています。その中に、周祺さんがきちんと入って合唱をしています。今月初めに中国・上海から転校してきたばかりなのに、口を動かし歌詞を歌っています。彼の歌声が聞こえてきます。先日は、元気クラブからの下校する際に、「先生、さよなら！」とお父さんに手を引かれながら、他の児童がするように職員室に向かって挨拶をしてくれました。そんな周祺さんは、とても可愛い！また、いつもと同じ姿勢と心持ちで、周祺さんを受け入れている庄川小学校の子どもたちは、すばらしい！